

流域ゴミ問題ワークショップ(仮称)開催の検討

1. 目的

漂流・漂着ゴミ問題の取り組みにあたっては、関係者の情報交換の場を設置し、ネットワーク化を進めていくことが重要である。全国レベルにおける連携強化のみならず、地域レベルにおける連携強化も重要な課題であり、とくに近傍の河川がゴミの発生源となっている可能性のある地域においては、河川流域全体の関係者の連携を強化することが有効である。本調査では、河川流域における NPO/NGO および自治体が一同に会し情報交換をする場の設置可能性について検討し、平成 20 年度の流域ゴミ問題ワークショップ(仮称)開催に資することを目的とする。

2. 調査内容

各モデル地域において自治体や地域で活動する NPO/NGO へのヒアリングを実施し、ワークショップ開催の可能性について検討するとともに、参加者候補を選定する。図 1 に調査の概要を示す。当初想定していた参加者の候補は以下のとおりである。

- ・当該海域において海岸の美化・環境保全に取り組む NPO/NGO
- ・近傍河川流域において河川の美化・環境保全に取り組む NPO/NGO
- ・流域の自治体
- ・流域の河川管理者
- ・流域の教育関係者
- ・環境省

なお、平成 20 年度には、本年度の調査結果を踏まえて、流域ゴミ問題ワークショップ(仮称)の準備を進め、平成 20 年秋以降にワークショップを開催し、参加者の有する知見やノウハウを共有するとともに、流域の課題について議論することを予定している。

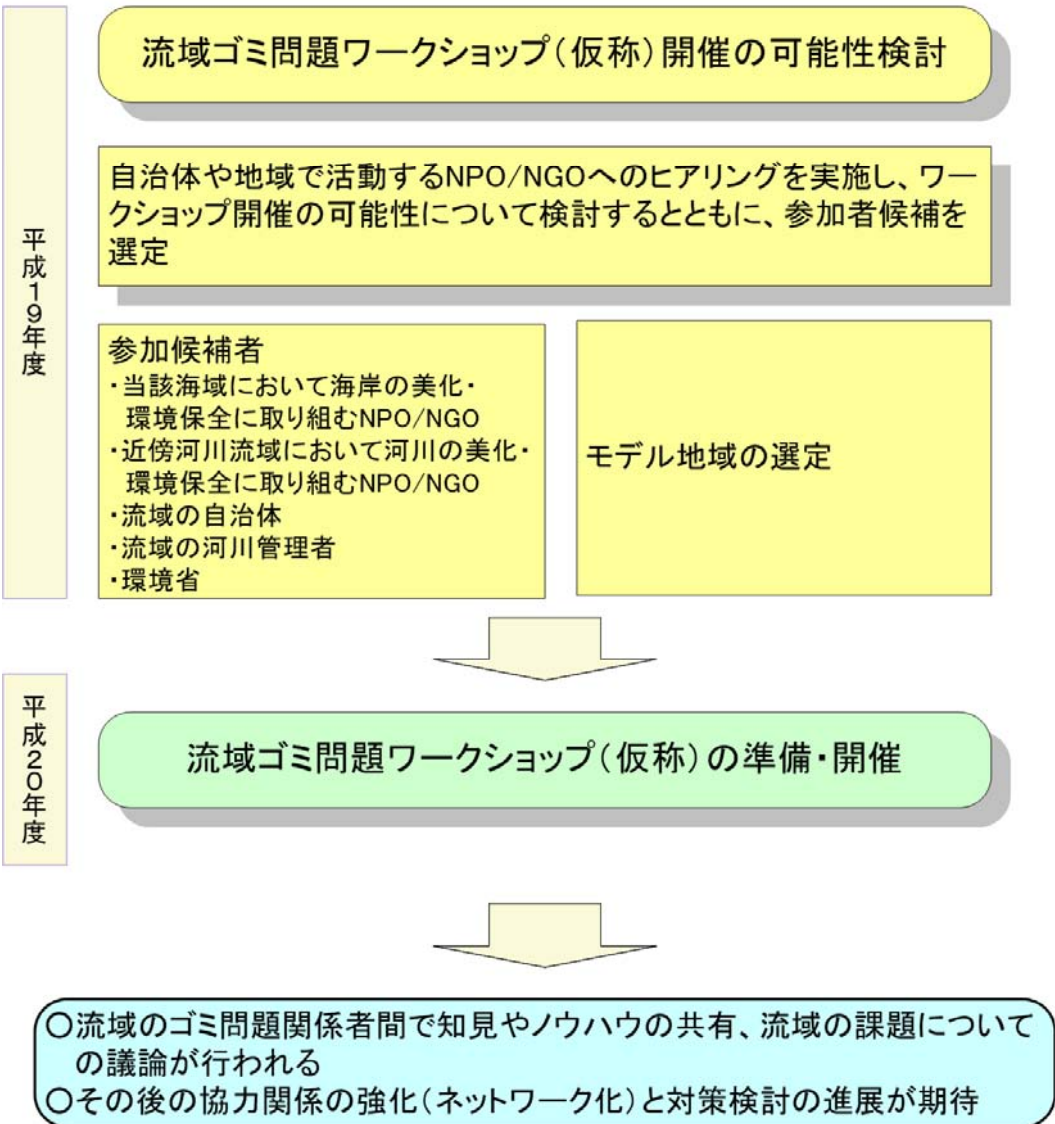
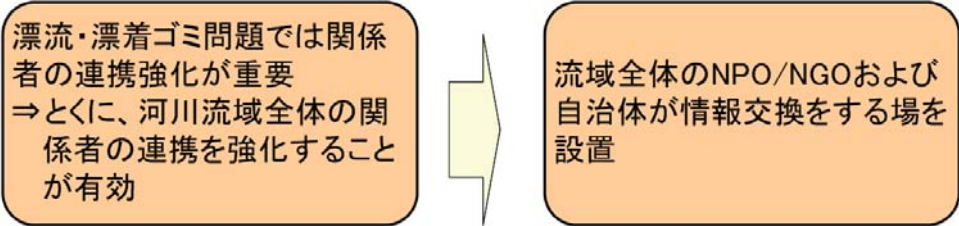


図 1 流域ゴミ問題ワークショップ(仮称)開催の検討の概要

3. 調査結果

ここでは、モデル地域のうち、福井県坂井市 梶地先海岸～安島地先海岸（九頭竜川流域）に関わる調査結果を示す。

3.1 ヒアリング結果の要点

ヒアリング対象機関と得られた主な情報・ご意見は以下のとおりである。

(1) 坂井市

①流域ゴミ問題ワークショップ開催の可能性／必要性

- 必要である。漂着ゴミは河口部だけの問題ではなく、上流部の人々にも関心を持ってもらいたい。
- これまでも旧坂井郡六町に対する啓発活動を何度か行ってきており、河川および海岸のゴミ漂着状況をみてもらった。これは、環境全般の中でゴミ問題をとりあつかっているもので、自治体だけでなく一般の方を対象としている。そのような実績があるため、開催の可能性も十分ある。
- 平成 19 年に国交省主催で開催された「九頭竜川“水・交流サミット”」に続いて活動をしていくことが必要。
- 河口部を抱えていない上流の自治体は関心が低い。旧坂井郡四町が合併して河口を抱える坂井市となったため、活動をやりやすい状況になった。上流の自治体も平成の大合併により数が少なくなったのでやりやすくなったと言える。

②九頭竜川のゴミ汚染の現状

- 陸側から見るとゴミは目立たないが、川側から見るとゴミが岸辺の水生植物の陰に隠れていることがわかる。これらは増水すると流される。この映像を人々に見せたところ反応が大きかった。
- 上流はゴミがとどまらないので、本当にきれいである。また、上流では河川敷が広くて視界が開けているため不法投棄ができない。車で入っていけるようなところでもない。
- 地域の人がゴミ拾いをできるような場所があまりない。河川敷の清掃活動をやっているような自治会の活動はあまりないのではないか。
- 福井市から下流は河川敷の大部分が田畑になっており、全国的にも珍しい。国有地を借用する形になっており、一種の既得権のようにになっている。そこで作物の残渣や持ち込んだゴミを燃やしたり捨てたりしている。肥料袋などもゴミとして出てくる。地域のゴミ捨て場になっているところもある。
- 足羽川源流の池田町、旧美山町（現福井市）では、河川のゴミ問題を重要視しているグループがある。池田町は環境への取り組みが進んでいる。
- 下流部では水辺まで田畑があるので、水辺に近づけるような場所がなく、市民の憩いの場としてあまり利用されているとは言えない。

③ワークショップの目的・内容

- 流域でゴミ問題に積極的に取り組む団体がそれほどある状態ではないので、まずは情報発信をして受け止めてもらう段階ではないか。
- 旧三国町では平成 15 年度から環境に関する啓発集会（その中でゴミ問題もとりあげている）を 5 回（フォーラム形式で 4 回）実施している。200 人を目安として開催すると下流部の住民を中心に 100～150 人は集められた。

④参加者の候補

- 国の直轄区間以外の河川・海岸の管理者は県であり、県との協同が必要であろう。
- 上流部から中流部の永平寺町までは鮎のイメージがある。漁協もあり関心が高いと思われる。
- ゴミ問題で活動している団体はあまり聞かない。流域にはサクラマスの団体（サクラマス・アンリミテッド）や、「NPO 法人ドラゴンリバー交流会」がある。河口には「エコネイチャー彩みくに」がある。

(2) 国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所

⑤九頭竜川サミットとの連携

- “水・交流サミット”では流域での一斉清掃の提案がなされた。
- 現在、「九頭竜川流域文化交流会」を立ち上げる計画をしており、福井県と調整をしている段階である。
- 治水事業にプラスしてゴミ問題も取り上げられているが、ゴミ拾いだけではなく、上流下流の文化交流なども必要であると考えている。
- ワークショップだけでは、規模的に広域的な活動は難しいと思われるので、流域文化交流会と連携していく事が重要なポイントとなるのではないかと。
- 河川流域の自治会レベルでの小規模なゴミ拾いは数多く実施されている。自治会の行事は年明けに決まるところが多い。全てに特定の日に集まってもらうことは不可能であり、順次実施せざるをえないが、どのようにつなげていくかが課題である。
- また、ゴミを集めると、その処理費用を国や自治体が負担しなければならない為、その点も詰めておかななくてはならない。

⑥河川管理

- 河川法の改正により環境の視点が加えられたが、主なポイントは動植物の保護に置かれている。しかし美観や水質、ゴミ対策は過去からの課題であり、色々と行事等の取り組みがなされている。不法に設置されている栈橋や船などは河川管理上問題があるため、今年度、簡易代執行を実施した。

⑦流域でゴミ問題に取り組んでいる団体

- 「NPO 法人ドラゴンリバー交流会」は足羽川でこの春に 1000 人規模の清掃を実施

すると聞いている。

(3) エコネイチャー彩みくに

⑧九頭竜川のゴミ汚染の現状

- あまりのゴミの多さに、下流部の人も慣れっこになってしまっているが、最終的に迷惑しているのは河口部の漁業者と、ゴミが漂着する県内、県外の海岸である。
- 一番の問題は不法投棄であり、そもそも水に対して無関心な人が多い。河川に家庭ゴミを捨てたり、家財道具や電化製品などの不法投棄が横行している。
- 少し増水すると三国港の突堤にごみが集まる。雨が降ると流れてくるゴミは、九頭竜川は農業系のゴミや流木が多く、足羽川や日野川では生活ゴミが多い。
- 九頭竜川は不法投棄が多く、ゴミの発生源は 80%は不法投棄、20%は河川沿いの人の無造作にごみを捨てる習慣であると考えている。一方、足羽川や日野川は河川で遊ぶ人のゴミが多い。
- 建設、建築の現場のマナーが悪い。工事が終わったあとの廃材やコンクリート塊などが不法投棄されている。家財道具などは個人で捨てる人もいると思われるが、大量にまとまって捨てられているものはダンプで捨てている可能性がある。
- 釣りを含め河川内でのレジャー活動も発生源になっているだろう。車からのポイ捨てもある。漁業者が不要になったクレモナロープを燃やして、燃えカスを捨てることもあった。河川敷で農業をしている人のマナーも問題である。
- 流域では昔から川にゴミを捨てる文化があった。いまでも年配の人には習慣が残っていて、ゴミをビニールに包んだまま捨てることがある。水が循環していることを上流の人も認識していない。
- ゴミが流れ出ることだけが問題ではなく、河川の生態系への影響も問題である。

⑨流域でゴミ問題に取り組んでいる団体

- これまでは、ボランティアで河川をきれいにしましょうという活動があり、「NPO 法人ドラゴンリバー交流会」などが継続的な活動を行っている。サクラマスの団体などもあるが、それらがネットワークを作って活動をしようということではなく、一年に一度のイベント時に当団体に声がかかる程度である。
- 上流の方で、ゴミの処理をまとめてやっているような活動はあったが、そもそもゴミを出さないようにしようという活動ではなかった。
- 河口と上流を結べるような交流の場があるとよい。

⑩活動を活発にするための工夫

- 話し合いをしながら一番良い方法を編み出すようにすることが重要である。
- 親しまれる河川でないとだめである。守る価値があると感じさせないと、意識が変わっていかない。九頭竜川の水のおかげでおいしい米や酒を作ることができていることを再認識する必要がある。

- 農業団体（例えば JA の理事など）にも加わってもらって現状を理解してもらい、協力してもらう必要がある。

3.2 ワークショップ開催の可能性についての検討

流域を巻き込んだ活動を行っていく場合には、国土交通省福井河川国道事務所が立ち上げようとしている「九頭竜川流域文化交流会」と連携を図っていく必要があるが、現在具体化が進められている段階であるため、その動向を注視する必要がある。

その上で、本地域においてワークショップを開催する場合には、以下のような方策がありうると思われる。

①関係団体を中心としたワークショップ

流域においてゴミ問題を取り扱う団体はいくつかあるものの、現時点では、それらが集まって対策を検討するといった段階に達しているわけではない。まずは少数の核となりうる団体から情報発信を行い、関心のある人々に受け止めてもらうことにより、裾野を広げ全体の底上げをしていくことが必要な段階にあると考えられる。

情報発信者としては、「エコネイチャー彩みくに」や「NPO 法人ドラゴンリバー交流会」などがあげられるだろう。重要な受け手となりうるのは、河川ゴミや漂流・漂着ゴミに限らずゴミ問題に取り組んでいる団体（リデュース・リユース・リサイクルに関わる団体）、河川や海岸・海洋の環境保全に関わる団体の他、ごく狭い地域レベルで河川清掃を実施している団体（自治会や学校）であろう。

ゴミ清掃活動は重要な取り組みではあるが、その実施自体が最終の目的になってしまうのは問題の解決にはつながらない。ゴミ清掃活動等を通じてゴミ問題に多少なりとも関心を有するようになった感度の高い人々を手始めとして、人々の意識を変え、最終的にはゴミの発生抑制につなげることが必要である。

そのためには、最終的にゴミが流れ着く河口や海岸の状況を知ってもらうことがはじめの一歩となる。単に現状の映像・画像を見せるだけでなく、海岸のクリーンアップ活動と組み合わせた体験型の集まりが効果的と思われる。これまでも旧三国町において 2004 年以降、毎年「環境フォーラム」が開催され、100 名以上の参加者を集めてきた実績があることから、開催の可能性は十分あると考えられる。そのような活動を通じて、まずは緩やかなネットワークを形成していくことがひとつの方法であろう。

②小学生を対象としたワークショップ

流域全体においてゴミを「水に流す」文化が仮にあるとするならば、一部のもともに関心の高い人々だけでなく、むしろ流域全体での意識と行動の変革を進めていく必要がある。その場合、一人一人がゴミを捨てた結果、川岸や河口・海岸に集まるゴミの現状を知ってもらうことが必要であると同時に、河川の自然に親しむ機会を提供し、このようなすばらしい場所を守りたいというインセンティブを与えることも必要である。

ただし、一般の人々の意識を変えることは並大抵なことではなく、より意識の変わりやすい

小学生への教育を主とし、彼らから大人を変えていくという仕組みが有効と考えられる。

いずれにしても、「九頭竜川流域文化交流会」と連携を図っていくことが重要であり、その立ち上げの動向を踏まえながら、具体化を進めていく必要があると言える。